

問一

(ウ)	(イ)				(ア)			
	d	c	b	a	d	c	b	a
①	①	①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④	④	④	④

(ウ)は四点、他は各二点

問二

(カ)	(オ)	(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④

各四点

問三

(ケ)	(ク)	(キ)	(カ)	(オ)	(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
①	①	①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④	④	④	④

(ア)(イ)は各二点、他は各四点

問四

(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④

各四点

問五

(イ)	(ア)
※解答欄は裏面にあります。	
	①
	②
	③
	④

(ア)は四点、(イ)は六点

問五

(イ)			
世帯数が増える一方で平均世帯人員が少ない原因は、	生	帯	加
	活	あ	し
	様	た	た
	式	り	
	や	の	
	価	人	35
	値	数	
	観	が	
	が	少	
	変	な	25
	化	い	
	し	世	
	、	帯	
	一	が	
	世	増	

ということにあると考えられます。

◎採点上の注意

【中間点のある記述問題について】

- ・ 中間点は、問五(イ)以外には設けないこと。
- ・ 正答例以外であっても、与えられた条件をすべて満たし、問題の趣旨に即した文ならば、正答として六点を与える。
- ・ 内容については、中間点を設けないこと。
- ・ 誤字・脱字(指定語句及び句読点に係る誤りを含む)については、その数にかかわらず二点減点とする。
- ・ 表現に問題があり、それによって明らかに問題の趣旨から外れている、内容を読み取ることができない等の場合は、誤答とする。ただし、許容できると判断した場合は、その数にかかわらず二点減点とする。
- ・ 中間点は、誤字・脱字(指定語句及び句読点に係る誤りを含む)がある場合と、表現に問題がある場合の減点以外は設けないこと。したがって、中間点は四点または二点となる。
- ・ 指定語句がある場合、その語句が含まれていない解答は誤答とする。

○問五(イ)について

得点項目A 内容については次の二点に触れていること。

- (あ) 「一世帯あたりの人数が減った」こと。
- (い) 「価値観や生活様式が変化した」こと。

〈正答例〉

(世帯数が増える一方で平均世帯人員が少ない原因は、)

価値観や生活様式が変化した中で、一世帯あたりの人数が減っていった

(ということにあると考えられます。)(32字)

解説

問一

- (ア) a 斬新 ざんしん
b 顕著 けんちょ
c 詮索 せんさく
d 委ねる ゆだ(ねる)
- (イ) a 軽快 1 模型 2 直径 3 軽視 4 警戒
b 効率 1 観光 2 有効 3 孝行 4 農耕
c 灯油 1 陶芸 2 与党 3 外灯 4 登用
d 省く 1 反省 2 招待 3 誠実 4 合唱
- (ウ) この俳句は、「花吹雪」という体言で終わる。「体言止め」の修辭技法が用いられている。花吹雪が空に舞う美しさを描いたものである。

問二

- (ア) — 線1の直前の文に着目する。「本村」は四重変異体を探しているが、自分が探す種のかに入っているかどうかはわからず、入っているとはいえずが思いになっていることが読み取れる。
- (イ) 「おもむろに手を下ろし、」で始まる段落から、— 線2が含まれる段落を確認する。短く切った爪が象徴しているのは、「本村」が送っている、一般的に「無味乾燥」と称されるような生活である。おしゃれなネイルアートをするような普通の生活に憧れる思いもありながら、そのような生活を送っている自分自身に対して、このままでいいのかと問いかけるように読むのが適当だと考えられる。
- (ウ) 「気がついたら本村は、」で始まる段落から、— 線3の直前までの内容をとらえる。種を探り続けて実験をしているうちに妙な精神状態に陥ってしまったとあり、そのために何もおかしく感じるような出来事がないのに、笑い出してしまっている。
- (エ) 直前のセリフなどに着目する。種採りを頑張っている「本村」の研究に対して悲観的な意見ばかり言う「加藤」を咎めた発言である。
- (オ) 直後の文に着目する。実験を繰り返している「本村」は、シロイヌナズナの種に似ているものに過敏に反応する状態になってしまっている。
- (カ) 本文と選択肢をよく見比べる。実験を繰り返す、妙な精神状態になっている「本村」に研究

問三

- (ア) Aは前の内容があとの内容の理由になっているので、順接の接続詞「だから」が入る。Bのあとでは、前提条件に対する例外を指摘しているので、譲歩を意味する副詞「むろん」が入る。「一回きり」も「一期一会」も共に「一度しかない機会」を表す言葉である。
- (ウ) IIと2は逆接の接続助詞。1は並立の接続助詞。3・4は副詞の一部。
- (エ) — 線1が含まれる段落の内容を確認する。科学が研究の対象とする現象には再現可能性がなければならぬ。一回きりの現象には再現可能性がないため、科学の対象になるのかわからないのかの議論の根拠はここに求められる。
- (オ) — 線2が含まれる段落の冒頭の三文に着目する。現代では、一回きりの事象であっても必然的に生じた事象であると考えられるために、科学で研究するのは妥当であるとされる。そのため一回きりの出来事である宇宙論におけるビッグバンなども研究の対象となり、一つの理論の確立が認められるまでになっている。
- (カ) — 線3が含まれる段落に着目する。自然界の現象には何らかの規則性がある筋をたどることができるとされている。事象を事後に検討し、法則を見つけようとする試みのことを「科学の営み」かもしれないと述べているのである。
- (キ) 「例えば、地球の衛星」で始まる段落から、— 線4が含まれる段落の内容を確認する。生物の進化論の場合も月の起源の場合と同様に、偶然が重要な役割を果たした可能性があるものの、定説に近い有力な説が支持されているのである。
- (ク) — 線5の直前の内容に着目する。一例だけの自然現象とは思えない電波などの「特殊例をどう評価するか」ということに科学の限界が試されているということである。つまり、一例しかない現象も研究の対象になり得るのだが、特殊例に固執すると、誤った結論を導きかねないため、特殊例をどこまで科学で扱うべきかを検討しなければならないということである。
- (ケ) 本文では、研究対象として適切なものとは何

かを説明し、その原因が一回きりのものである場合、特殊例なのか、本質を表すものなのかの判断は容易ではないとしている。

問四

(ア) 「親守」の話している内容に着目する。一日に二枚程度書いていたら十数年もすれば大般若を写し終えられるという内容を聞いて、長家は書写に成功したのである。

(イ) — 線2の直後の四文からとらえる。二人が一緒に行動して、一人は別の行動をしているが、三人はみな長家を守っているかのようだったのである。

(ウ) — 線3の直前の「十六善神の立ちそひて加護し給ひけるにや」に着目する。十六善神は『般若経』とその教えを心に留めている者を守護するとされる神々のことなので、大般若を写した「長家」はその神々によって守護されているのだろうと考えられる。そのことに対して、尊くすばらしいことだと考えたのである。

(エ) 本文全体と選択肢を照合する。「長家」は、「親守」が話しているのを聞いたことで思い立ち、自分は大般若を写すことができたと伝えるために、「親守」のもとを訪れて感謝している。

現代語訳

神祇権の少副の大中臣親守は、以前から大般若を一人で全巻を書写したい念願があったけれども、無為なまま過ぎてしまった。日頃の口癖に、「この願いを心にかけて、一日に二枚ぐらいつ書き申し上げても、十余年かければ完成できるだろう。残念にも思い立たなかったが。」と言ったのを、前の権の大副の大中臣長家が聞いて、たちまちに悟って、この願いを思い立って、ついに(大般若を)一人で全巻の書写を終えた。供養の後、激しい歓喜のあまりに親守のもとに行って言ったのには、「このことは元々私の思い寄ったものではありませんでした。(親守が)おっしゃっていた旨を聞いて、自ら願って大きな仕事を成し遂げたのは、まったくもって御恩であります。一つにはそのことを感謝したいがために、わざわざやってみました。」といった対面したのを見ると、小さい鬼が三人、長家に従っていた。その背丈は赤ん坊ほど

であった。(長家が)縁をのぼったときは、二人は庭にひざまづいて正座をしていた。すぐに二人は(長家に)従って上にのぼっていた。一人は下において、皆長家を守護する様子であった。このようなことは、夢などで見たことはあったが、まさしく現実に見ることは不思議なことであった。大般若の書写によって十六善神が付き添ってお守りなされたのであろうか。尊くすばらしいことである。この親守は、五部の大乘経を自筆で書き上げた人である。ほんとうに正直者で、決してうそなどつかない人である。「こんな不思議なことがあったものだ。」と、親守が語ったのを聞いて書きしました。

問五

(ア) 世帯数は二〇二〇年は五五八三万世帯で、これは一九八〇年の三六〇一万五千世帯の約一五五%である。数値での差は一九八一万五千(世帯)。平均世帯人員は二〇二〇年は二・二一人で、これは一九八〇年の三・二五人の六八%である。数値の差は一・〇四である。

(イ) グラフ、資料からは、世帯数が増えている一方で、一世帯あたりの人数が少なくなっていることがわかり、会話の中でその原因として高齢化の問題が挙げられている。また、高齢化の問題や高度経済成長期のこと、未婚化・晩婚化などについて言及し、価値観や生活様式の変化と結び付けている。これらのことに着目し、解答をまとめる。